

源氏物語

野分卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

野分

紫式部

與謝野晶子訳

けざやかにめでたき人ぞ在^いましたる野

分^あが開くる絵巻のおくに
(晶子)

ちゆうぐう
中宮のお住居^{すまい}の庭へ植えられた秋草は、今年^{こと}はことさら種類が多く
て、その中へ風流な黒木、赤木のませ垣^{がき}が所々に結^ゆわれ、朝露夕露の
置き渡すころの優美な野の景色^{けしき}を見ては、春の山も忘れるほどにおも

しろかった。春秋の優劣を論じる人は昔から秋をよいとするほうの数が多いのであつたが、六条院の春の庭のながめに説を変えた人々はまたこのごろでは秋の讚美者になつていた、世の中というもののよう

に。
中宮はこれにお心が惹かれてずっと御実家生活を続けておいでになるのであるが、音楽の会の催しがあつてよいわけではあつても、八月は父君の前皇太子の御忌月おんきづきであつたから、それにはばかりお暮らしになるうちにますます草の花は盛りになった。今年の野分の風は例年のわきよりも強い勢いで空の色も変わるほどに吹き出した。草花のしおれるのを見てはそれほど自然に対する愛のあるのでもない浅はかな人さえも心が痛むのであるから、まして露の吹き散らされて無惨むざんに乱れてい

く秋草を御覧になる宮は御病気にもおなりにならぬかと思われるほどの御心配をあそばされた。おおうばかりの袖そでというものは春の桜によりも実際は秋空の前に必要なものかと思われた。日が暮れてゆくにしたがってしいたげられる草木の影は見えずに、風の音ばかりのつづてくるのも恐ろしかったが、格子なども皆おろしてしまったので宮はただ草の花を哀れに思いになるよりほかしかたもおありにならなかった。

南の御殿のほうも前の庭を修理させた直後であつたから、この野分にもとあらの小萩こはぎが奔放に枝を振り乱すのを傍観しているよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれないふうの秋草を女王によおうは縁の近くに出てながめていた。源氏は小姫君の所にいたころであつたが、

中將が来て東の渡殿わたどのの衝立ついたての上から妻戸の開いた中を何心もなく見ると女房がおおぜいいた。中將は立ちどまって音をさせぬようにしてのぞいていた。屏風びょうぶなども風のはげしいために皆畳み寄せてあつたから、ずっと先のほうもよく見えるのであるが、その縁付きの座敷にいる一女性が中將の目にはいった。女房たちと混同して見える姿ではない。氣高けだかくてきれいで、さつと匂においの立つ氣がして、春あけぼのかすみの曙の霞の中から美しい樺桜かばざくらの咲き乱れたのを見いだしたような氣がした。夢中になつてながめる者の顔にまで愛嬌あいきょうが反映するほどである。かつて見たことのない麗人である。御簾みすの吹き上げられるのを、女房たちがおさえ歩くのを見ながら、どうしたのかその人が笑つた。非常に美しかった。草花に同情して奥へもはいらずに紫の女王がいたのである。

女房もきれいな人ばかりがいるようであつても、そんなほうへは目に移らない。父の大臣が自分に接近する機会を与えないのは、こんなふうに男性が見ては平静でありえなくなる美貌びぼうの継母と自分を、聡明そうめいな父は隔離するようにして親しませなかつたのであつたと思うと、中將は自身の隙見すきみの罪が恐ろしくなつて、立ち去ろうとする時に、源氏は西側の襖子ふすまをあけて夫人の居間へはいつて来た。

「いやな日だ。あわただしい風だね、格子を皆おろしてしまふがよい、男の用人がこの辺にもいるだろうから、用心をしなれば」

と源氏が言っているのを聞いて、中將はまた元の場所へ寄つてのぞいた。女王は何かものを言つていて源氏も微笑しながらその顔を見ていた。親という気がせぬほど源氏は若くきれいで、美しい男の盛りの

ように見えた。女の美もまた完成の域に達した時であろうと、身にしむほどに中將は思ったが、この東側の格子も風に吹き散らされて、立っている所が中から見えそうになったのに恐れて身を退けてしまった。そして今来たように咳^{せき}払いなどをしながら南の縁のほうへ歩いて出た。

「だから私が言ったように不用心だったのだ」

こう言った源氏がはじめて東の妻戸のあいていたことを見つけた。長い年月の間こうした機会がとらえられなかったのであるが、風は巖^{いわ}も動かすという言葉に真理がある、慎み深い貴女^{きじょ}も風のために端へ出ておられて、自分に珍しい喜びを与えたのであると中將は思ったのであった。家司^{けいし}たちが出て来て、

「たいへんな風力でございます。北東から来るのでございますから、こちらはいくぶんよろしいわけでございます。馬場殿と南の釣殿つりどのなどは危険に思われます」

などと主人に報告して、下人げにんにはいろいろな命令を下していた。

「中将はどこから来たか」

「三条の宮にいたのでございますが、風が強くなりそうだと人が申すものですから、心配でこちらへ出て参りました。あちらではお一方ひとかたきりなので、心細そうになさいます。風の音なども若い子のように恐ろしがっていられますからお気の毒に存じまして、またあちらへ参ろうと思います」

と中将は言った。

「ほんとうにそうだ。早く行くがいいね。年がいつて若い子になると
いうことは不思議なようでも実は皆そうなのだね」

と源氏は大宮に御同情していた。

騒がしい天気でございますから、いかがとお案じしておりますが、
この朝臣あそんがお付きしておりますことで安心してお伺いはいたしませ
ん。

という挨拶あいさつを言づてた。途中も吹きまくる風があつて侘わびしいので
あつたが、まじめな公子であつたから、三条の宮の祖母君と、六条院
の父君への御機嫌きげん伺いを欠くことはなくて、宮中の御謹慎日などで、
御所から外へ出られぬ時以外は、役所の用の多い時にも臨時の御用の
忙しい時にも、最初に六条院の父君の前へ出て、三条の宮から御所へ

出勤することを規則正しくしている人で、こんな悪天候の中へ身を呈するようなお見舞いなども苦勞とせずにした。宮様は中將が來たので力を得たようにお喜びになった。

「年寄りの私がまだこれまで経験しないほどの野分ですよ」

とふるえておいでになった。大木の枝の折れる音などもすごかった。家々の瓦の飛ぶ中を來たのは冒険であつたとも宮は言っておいでになった。はなやかな御生活をあそばされたことも皆過去のことになって、この人一人をたよりにしておいになる御現状を拝見しては無常も感ぜられるのである。今でも世間から受けておいでになる尊敬が薄らいだわけではないが、かえってお一人子の内大臣の取る態度にあたたかさの欠けたところがあつた。

夜通し吹き続ける風に眠りえない中將は、物哀れな気持ちになつていた。今日は恋人のことが思われずに、風の中でした隙見^{すきみ}ではじめて知るを得た継母の女王の面影が忘られないのであつた。これはどうしたとか、だいそれた罪を心で犯すことになるのではないかと思つて反省しようとしてとめるのであつたが、また同じ幻が目に見えた。過去にも未来にもないような美貌^{びぼう}の方である、あれほどの夫人のおられる中へ東の夫人が混じつておられるなどということは想像もできないことである。東の夫人がかわいそうであるとも中將は思った。父の大臣のりっぱな性格がそれによつて証明された氣もされる。まじめな中將は紫の女王を恋の対象として考えるようなことはしないのであるが、自分もああした妻がほしい、短い人生もああした人といつしよにいれ

ば長生きができるであろうなどと思い続けていた。

明け方に風が少し湿気を帯びた重い音になつて村雨風な雨になつた。むらさめ

「六条院では離れた建築物が皆倒れそうでございます」

などと侍が報じた。風が揉み抜もいている間、広い六条院は大臣の住

居い辺はおおぜいの人が詰めているであろうが、東の町などは人少なで

はなちるさと

花散里夫人は心細く思つたことであろうと中将は驚いて、まだほのぼ

の白しらむころに三条の宮から訪たずねに出かけた。横雨が冷ややかに車へ吹

き込んで来て、空の色もすごい道を行きながらも中将は、魂が何とな

く身に添わぬ気がした。これはどうしたこと、また自分には物思いが

一つふえることになつたのかと慄然りつぜんとした。これほどあるまじいこと

はない、自分は狂氣したのかともいろいろに苦しんで六条院へ着いた
中將は、すぐに東の夫人を見舞いに行つた。非常におびえていた花散
里をいろいろと慰めてから、家司けいしを呼んで損ねた所々の修繕を命じ
て、それから南の町へ行つた。まだ格子は上げられずに人も起きてい
なかつたので、中將は源氏の寢室の前にあたる高欄によりかかつて庭
をながめていた。風のあとの築山つきやまの木が被害を受けて枝などもたくさ
ん折れていた。草むらの乱れたことはむろんで、檜皮ひわだとか瓦かわらとかが飛
び散り、立部たてじとみとか透垣すきがきとかが無数に倒れていた。わずかだけさした日
光に恨み顔な草の露がきらきらと光っていた。空はすぐく曇つて、霧
におおわれているのである。こんな景色けしきに対していて中將は何とい
うことなしに涙のこぼれるのを押し込むように拭ふいて咳せき払いをしてみ

た。

「中將が来ているらしい。まだ早いだろうに」

と言つて源氏は起き出すのであつた。何か夫人が言っているらしいが、その声は聞こえないで源氏の笑うのが聞こえた。

「昔もあなたに経験させたことのない夜明けの別れを、今はじめて知つて寂しいでしょう」

と言っているのが感じよく聞こえた。女王の言葉は聞こえないのであるが、一方の言葉から推して、こうした戯れを言い合う今も緊張した間柄であることが中將にわかつた。格子を源氏が手ずからあけるのを見て、あまり近くいることを遠慮して、中將は少し後へ退いた。

「どうだったか、昨晚伺つたことで宮様はお喜びになつたかね」

「そうでございました。何でもないことにもお泣きになりますからお気の毒で」

と中將が言う。源氏は笑って、

「もう長くはいらっしゃらないだろう。誠意をこめてお仕えしておくがいい。内大臣はそんなふうでないと私へおこぼしになったことがある。華美なきらきらしいことが好きで、親への孝行も人目を驚かすようにしたい人なのだね。情味を持ってどうしておあげしようというよ
うなことのできない人なのだよ。複雑な性格で、非常な聡明そうめいさで末世の大臣に過ぎた力量のある人だがね。まあそう言えばだれにだって欠点はあるからね」

などと源氏は言うのであった。

「あの大風に中宮付きちゆうぐうつきの役人は皆出て来ていたか、昨夜ゆうべのことが不安だ」

と言つて、源氏は中将を見舞いに出すのであつた。

昨晚の風のきついころはどうしておいになりましたか。私は少し
そのころから身体からだの調子がよろしゅうございませんでただ今はま
だ伺われません。

という挨拶あいさつを持たせてやったのである。そこを立ち廊の戸を通つて
中宮の町へ出て行く若い中将の朝の姿が美しかった。東の対の南側の
縁に立つて、中央の寢殿を見ると、格子が二間ほだけ上げられて、
まだほのかな朝ぼらけに御簾みすを巻き上げて女房たちが出ていた。高欄
によりかかつて庭を見ているのは若い女房ばかりであつた。打ち解け

た姿でこうしたふうに出ていたりすることはよろしくなくても、これは皆きれいにいろいろな上着に裳^もまでつけて、重なるようにしてすりながらおおぜいで出ているので感じのよいことであつた。中宮は童女を庭へおろして虫籠^{むしかご}に露を入れさせておいでになるのである。紫^{しおん}※色、撫子色^{なでしこ}などの濃い色、淡い色の柏^{あこめ}に、女郎花色^{おみなえし}の薄物の上着などの時節に合つた物を着て、四、五人くらいずつ一かたまりになつてあなたこなたの草むらへいろいろな籠を持って行き歩いていて、折れた撫子の哀れな枝なども取つて来る。霧の中にそれらが見えるのである。お座敷の中を通つて吹いて来る風は侍従香の匂^{にお}いを含んでいた。貴女^{きじよ}の世界の心憎さが豊かに覚えられるお住居^{すまい}である。驚かすような気がして中將は出にくかつたが、静かな音をたてて歩いて行くと、女

房たちはきわだつて驚いたふうも見せずに皆座敷の中へはいってしまつた。宮の御入内ごじゅだいの時に童形どうぎようで供奉ぐぶして以来知り合いの女房が多くて中將には親しみのある場所でもあつた。源氏の挨拶あいさつを申し上げてから、宰相の君、内侍ないしなどもいるのを知つて中將はしばらく話していた。ここにはまたすべての所よりも氣高けだかい空氣があつた。そうした清い気分の中で女房たちと語りながらも中將は昨日きのう以来の悩ましさを忘れることができなかった。

歸つて来ると南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜ゆうべ氣にかけながら寝た草花が所在も知れぬように乱れてしまつたのをながめている時であつた。中將は階段の所へ行つて、中宮のお返辭を報じた。

荒い風もお防ぎくださいますでしょうと若々しく頼みにさせていた
だいているのでございますから、お見舞いをいただきましてははじめ
て安心いたしました。

というのである。

「弱々しい宮様なのだからね、そうだったろうね。女はだれも皆こわ
くてたまるまいという気のした夜だったからね、実際不親切に思召し
ただろう」

と言つて、源氏はすぐに御訪問をすることにした。直衣のうしなどを着る
ために向こうの室の御簾みすを引き上げて源氏がいゐる時に、短い几帳きちようを
近くへ寄せて立てた人の袖口そでぐちの見たのを、女王にょおうであろうと思つと胸
が湧わき上がるような音をたてた。困つたことであると思つて中将はわ

ざと外のほうをながめていた。源氏は鏡に向かいながら小声で夫人に言う、

「中将の朝の姿はきれいじゃありませんか、まだ小さいのだが洗練されても見えるように思うのは親だからかしら」

鏡にある自分の顔はしかも最高の優越した美を持つものであると源氏は自信していた。身なりを整えるのに苦心をしたあとで、

「中宮にお目にかかる時はいつも晴れがましい気がする。なんらの見識を表へ出しておいでになるのではないが、前へ出る者は気がつかわれる。おおように女らしくて、そして高い批評眼が備わっているというようなかただ」

こう言いながら源氏は御簾から出ようとしたが、中将が一方を見つ

めて源氏の来ることにも気のつかぬふうであるのを、鋭敏な神経を持つ源氏はそれをどう見たか引き返して来て夫人に、

「昨日風の紛れに中將はあなたを見たのじゃないだろうか。戸があいつていたでしょう」

と言うと女王は顔を赤くして、

「そんなこと。渡殿わたどののほうには人の足音がしませんでしたもの」
と言っていた。

「しかし、疑わしい」

源氏はこう独言ひとりごとを言いながら中宮の御殿のほうへ歩いて行った。また供をして行った中將は、源氏が御簾みすの中へはいつている間を、渡殿の戸口の、女房たちの集まっているけはいのうかがわれる所へ行つ

て、戯れを言ったりしながらも、新しい物思ひのできた人は平生よりもめいっただふうをしていた。

そこからすぐに北へ通つて明石^{あかし}の君の町へ源氏は出たが、ここでははかばかしい家司^{けいし}風の者は来ていないで、下仕えの女中などが乱れた草の庭へ出て花の始末などをしていた。童女が感じのいい姿をして夫人の愛している竜胆^{りんどう}や朝顔がほかの葉の中に混じってしまったのを選^えり出していたわっていた。物哀れな気持ちになつていて明石は十三絃^{げん}の琴を弾^ひきながら縁に近い所へ出ていたが、人払いの聲がしたので、平常着^{ふだんぎ}の上へ棹^{さお}からおろした小桂^{こうちぎ}を掛けて出迎えた。こんな急な場合にも敬意を表することを忘れない所にこの人の性格が見えるのである。座敷の端にしばらくすわつて、風の見舞いだけを言つて、そのま

ま冷淡に帰って行く源氏の態度を女は恨めしく思った。

おほかたの荻をぎの葉過ぐる風の音もうき身一つに沁しむこちして

こんなことを口ずさんでいた。

源氏が東の町の西の対へ行つた時は、夜の風が恐ろしくて明け方まで眠れなくて、やっと睡眠したあとの寝過ごしをした玉鬢たまかすらが鏡を見ている時であつた。たいそうに先払いの声を出さないようにと源氏は注意びようぶして、そつと座敷へはいった。屏風なども皆畳んであつて混雑びぼうした室内へはなやかな秋の日ざしがはいった所に、あざやかな美貌びぼうの玉鬢たまかすらがすわっていた。源氏は近い所へ席を定めた。荒い野分の風もこ

ここでは恋を告げる方便に使われるのであった。

「そんなふうなことを言つて、私をお困らせになりますから、私はあの風に吹かれて行つてしまいたく思いました」

と機嫌きげんをそこねて玉鬢が言つと源氏はおもしろそうに笑つた。

「風に吹かれてどこへでも行つてしまおうというのは少し軽々しいことですね。しかしどこか吹かれて行きたい目的の所があるでしょう。あなたも自我を現わすようになって、私を愛しないことも明らかにするようになりましたね。もつともですよ」

と源氏が言つと、玉鬢は思つたままを誤解されやすい言葉で言つたものであると自身ながらおかしくなつて笑っている顔の色がはなやかに見えた。海酸漿うみほおずきのようにふつくらとしていて、髪の間から見える膚

の色がきれいである。目があまりに大きいことだけはそれほど品のよいものでなかった。そのほかには少しの欠点もない。中將は父の源氏がゆつくりと話している間に、この異腹の姉の顔を一度のぞいて知りたいとは平生から願っていることであつたから、隅すみの部屋へやの御簾みすが几帳きちょうも添ようえられてあるが、乱れたままになつてゐる、その端をそつと上げて見ると、中央の部屋との間に障害になるような物は皆片づけられてあつたからよく見えた。戯れていることは見ていてわかることであつたから、不思議な行為である。親子であつても懷ふところに抱きかかえる幼年者でもない、あんなにしてよいわけのものでもないのにと目がとまった。源氏に見つけられないかと恐ろしいのであつたが、好奇心がつつてなおのぞいていると、柱のほうへ身体からだを少し隠すように姫君

がしているのを、源氏は自身のほうへ引き寄せていた。髪の波が寄つて、はらはらとこぼれかかっていた。女も困つたようなふうはしなながらも、さすがに柔らかに寄りかかっているのを見ると、始終このなれなれしい場面の演ぜられていることも中将に合点がてんされた。悪感おかんの覚えられることである、こういうわけであろう、好色なお心であるから、小さい時から手もとで育たなかった娘にはああした心も起こるのであらう、道理でもあるがあさましいと真相を知らない中将にこう思われている源氏は気の毒である。玉鬘は兄弟であつても同腹でない、母が違ふと思えば心の動くこともあらうと思われる美貌であることを中将は知つた。昨日見た女王によおうよりは劣つて見えるが、見ている者が微笑ほほえまれるようなはなやかさは同じほどに思われた。八重の山吹やまぶきの咲き乱れ

た盛りに露を帯びて夕映えのもとにあつたことを、その人を見ていて中將は思い出した。このごろの季節のものではないが、やはりその花に最もよく似た人であると思われた。花は美しくても花であつて、またよく乱れた蕊しべなども盛りの花といつしよにあつたりなどするものであるが、人の美貌はそんなものではないのである。だれも女房がそばへ出て来ない間、親しいふうに二人の男女は語っていたが、どうしたのかまじめな顔をして源氏が立ち上がった。玉鬘が、

吹き乱る風のけしきに女郎花をみなへししを萎れしぬべきここにこそすれ

と言った。これはその人の言うのが中將に聞こえたのではなくて、

源氏が口にした時に知ったのである。不快なことがまた好奇心を引きもして、もう少し見きわめたいと中将は思ったが、近くにいたことを見られまいとしてそこから退^のいていた。源氏が、

「しら露に靡^{なび}かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

弱竹^{なよたけ}をお手本になさい」

と言ったと思つたのは、中将の僻耳^{ひがみみ}であつたかもしれぬが、それも氣持ちの悪い会話だとその人は聞いたのであつた。

^{はなちるさと}

花散里の所へそこからすぐに源氏は行つた。今朝^{けさ}の肌寒^{はだ}さに促され
たように、年を取つた女房たちが裁ち物などを夫人の座敷でしてい

た。細櫃ほそびつの上で真綿をひろげている若い女房もあつた。きれいに染め上がった朽ち葉色の薄物、淡紫うすむらさきのでき上がりのよい打ち絹などが散らかつている。

「なんですこれは、中将の下襲したかさねなんですか。御所の壺前つぼせんざい栽の秋草の宴なども今年はだめになるでしょうね。こんなに風が吹き出してしまつてはね、見ることも何もできるものでないから。ひどい秋ですね」

などと言いながら、何になるのかさまさまの染め物織り物の美しい色が集まっているのを見て、こうした見立ての巧みなことは南の女王にも劣っていない人であると源氏は花散里を思った。源氏の直衣のうしの材料の支那しなの紋綾もんあやを初秋の草花から摘んで作った染料で手染めに染め上げたのが非常によい色であつた。

「これは中将に着せたらいい色ですね。若い人には似合うでしょう」

こんなことも言って源氏は帰って行った。

めんどろ面倒な夫人たちの訪問の供を皆してまわって、時のたったことで中

将は気が気でなく思いながら妹の姫君の所へ行った。

「まだ御寢室にいらっしゃるのでございますよ。風をおこわがりになつて、今朝はもうお起きになることもおできにならないのでございます」

と、めのと乳母が話した。

「悪い天気でしたからね。こちらで宿直とのいをしてあげたかったのだが、宮様が心細がつていらっしゃったものですからあちらへ行ってしまうたのです。お雛ひな様の御殿はほんとうにたいへんだったでしょう」

女房たちは笑って言う、

「扇の風でもたいへんなのでございますからね。それにあの風でございましょう。私どもはどんなに困ったことでしょう」

「何でもない紙がありませんか。それからあなたがたがお使いになる硯すずりを拝借しましょう」

と中將が言ったので女房は棚たなの上から出して紙を一巻ふたき蓋に入れて硯といっしょに出してくれた。

「これはあまりよすぎて私の役にはたちにくい」

と言いながらも、中將は姫君の生母が明石夫人であることを思あかしつて、遠慮をしすぎる自分を苦笑しながら書いた。それは淡紫の薄様うすようであつた。丁寧ていねいに墨をすって、筆の先をながめながら考えて書いている

中將の様子は艶えんであつた。しかしその手紙は若い女房を羨望せんぼうさせる一女性にあてて書かれるものであつた。

風騒ぎむら雲迷ふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

という歌の書かれた手紙を、穂の乱れた刈萱かるかやに中將はつけていた。

女房が、

「交野かたのの少將は紙の色と同じ色の花を使つたそうでございますよ」と言つた。

「そんな風流が私にはできないのですからね。送つてやる人だつてまたそんなものなのですからね」

中將はこうした女房にもあまりなれなれしくさせない溝みぞを作つて話してゐた。品のよい貴公子らしい行為である。中將はもう一通書いてから右馬助うまのすけを呼んで渡すと、美しい童侍わらわざむらいや、ものなれた随身の男へさらに右馬助は渡して使いは出て行つた。若い女房たちは使いの行く先と手紙の内容とを知りたがつてゐた。姫君がこちらへ来ると言つて、女房たちがにわか立ち騒いで、几帳きちようの切れを引き直したりなどしてゐた。昨日から今朝にかけて見た麗人たちと比べて見ようとする氣になつて、平生はあまり興味を持たないことであつたが、妻戸みすの御簾みすへ身体からだを半分入れて几帳ほころの綻びからのぞいた時に、姫君がこの座敷へはいつて来るのを見た。女房が前を往ゆき来するので正確には見えない。淡紫の着物を着て、髪はまだ着物の裾すそには達せず、末のほうがわざと

ひろげたようになってゐる細い小さい姿が可憐かれんに思われた。一昨年ごろまでは稀まれに顔も見たのであるが、そのころよりはまたずっと美しくなつたようであると中将は思つた。まして妙齡になつたならどれほどの美人になるであらうと思われた。さきに中将の見た麗人の二人を桜と山吹にたとえるなら、これは藤ふじの花といつてよいようである。高い木にかかつて咲いた藤が風になびく美しさはこんなものであると思われた。こうした人たちを見たいだけ見て暮らしたい、継母であり、異母姉妹であれば、それのできないのがかえつて不自然なわけであるが、事實はそうした恨めしいものになつてゐると思うと、まじめなこの人も魂がどこかへあこがれて行つてしまふ氣がした。

三条の宮へ行くと宮は静かに仏勤めをしておいでになつた。若い美

しい女房はここにもいるが、身なりも取りなしも盛りの家の夫人たちに使われている人たちに比べると見劣りがされた。顔だちのよい尼女房の墨染めを着たのなどはかえってこうした場所にふさわしい感じがして感じよく思われた。内大臣も宮を御訪問に来て、灯^ひなどをともしてゆつくりと宮は話しておいでになった。

「姫君に長く逢^あいませんね。ほんとうにどうしたことだろう」とお言い出しになって、宮はお泣きになった。

「近いうちにお伺わせいたします。自身から物思いをする人になって、哀れに衰えております。女の子というものは実際持たなくていいものですね。何につけかにつけ親の苦勞の絶えないものです」

内大臣はまだあの古い過失について許し切っていないように言うの

を、宮は悲しくお思いになって、望んでおいでになることは口へお出しになれなかった。話の続きに大臣は、

「ものにならない娘が一人出て来まして困っております」と母宮に訴えた。

「どうしてでしょう。娘という名がある以上おとなしくないわけはないものですが」

「それがそういかないのです。醜態でございます。お笑いぐさにお目にかけていほどです」

と大臣は言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
